

# イタリア語諸方言における完了助動詞の分布と文法化の関連性について

Sul Rapporto tra la Grammaticalizzazione e la Distribuzione degli Ausiliari *essere* e *avere* dei Dialecti Italiani

櫻井 健

SAKURAI Takeshi

ロマンス諸語における複合完了形式は、助動詞と過去分詞によって成り立つが、助動詞の分布は言語によって異なる。現代イタリア語における分布の方言差を手掛かりとして、ここには完了という範疇の文法化プロセスが反映されていることを考察してゆく。

## 1. 現代イタリア語における完了助動詞の選択

イタリア語では自動詞の完了助動詞は本動詞によって *essere/avere* の選択を受ける。この助動詞は、他動詞に対しては受動/能動のマーカであり、自動詞完了の主語は *essere* では他動詞の意味的目的語、*avere* では他動詞の主語と同じ扱いを受ける。Van Valin(1995:6)では、動詞は3つのパラメータによって4クラスに分類され、それぞれに Logical Structure (LS) という意味的構造が与えられている。<sup>1)</sup>

State-of-Affairs Type	Aktionsart Type	dynamic	telic	punctual	Logical Structure
Event	Achievement	+	+	+	BECOME predicate' (x) or (x,y)
Process	Accomplishment	+	+	-	φ CAUSE φ *
Action	Activity	+	-	-	(DO(x)) predicate'(x) or (x,y)]
Situation	State	-	-	-	predicate' (x) or (x,y)

\*where φ is normally an activity predicate and φ an achievement predicate.

いくつかの動詞の LS と完了助動詞の対応を以下に例示する。

	Logical Structure	Verb Class	Auxiliary
a. stare	be-at'(x,y)	State	essere
b. morire	BECOME dead'(x)	Achievement	essere
c. arrivare	BECOME be-at'(x,y)	Achievement	essere
d. andare	[do'(x)]CAUSE[BECOME be-at'(x,y)]	Accomplishment	essere
e. sghiozzare	sob'(x)	Activity	avere
f. ballare	dance'(x)	Activity	avere
g. comminare	walk'(x)	Activity	avere

完了助動詞の選択、つまり主語の統語的扱いは動詞の LS が規定するといえる。LS における派生関係を考慮すると、<sup>2)</sup> 自動詞の完了助動詞選択について以下の定式化ができる (Van Valin 1990:233)

Select *essere* if the LS of the verb contains a state predicate.

## 2. 自動詞完了助動詞の方言的分布

イタリア語の諸方言は、1つの規範的方言から分化したものではなく、流動的な言語状況を反映して

成立している。したがって相互の類型的検討はロマンス語全体からなされる必要がある。

複合形式によるいわゆる完了形はロマンス諸語に一般的に認められる。イタリア諸方言も例外ではないが、<sup>3)</sup> 北部では統合的形式を圧迫してほぼ独占的形式である一方、南部では統合形式が用いられる機会が比較的多いとされる。完了形式の使用頻度とともに、形式の構成要素である助動詞が方言区分の基準となっている。標準語では *avere* と *essere* が区別されるが、南部諸方言あるいは Veneto 方言などでは助動詞として HABERE に由来するものが好まれる。これに対して中央部の一部方言(Southern Lazio, Southern Marche, Abruzzo)では ESSE に由来するものが助動詞として一般化されるか、人称による分裂が見られる(Tuttle 1986, Maiden 1995)。<sup>4)</sup> 以下の表を参照

<p>Terracina</p> <p>1. ESSE</p> <p>2. ESSE</p> <p>3. ESSE(HAB.)</p> <p>4. ESSE</p> <p>5. ESSE</p> <p>6. ESSE(HAB.)</p>	<p>Cori(LT)</p> <p>1. ESSE</p> <p>2. ESSE</p> <p>3. HAB.</p> <p>4. ESSE</p> <p>5. ESSE</p> <p>6. HAB.</p>	<p>Roiate/Zagarolo</p> <p>1. ESSE</p> <p>2. ESSE</p> <p>3. HAB.</p> <p>4. ESSE</p> <p>5. ESSE</p> <p>6. HAB.</p>	<p>L'Aquila/Avezzano/Pescara</p> <p>1. ESSE</p> <p>2. ESSE</p> <p>3. HAB.</p> <p>4. ESSE</p> <p>5. ESSE</p> <p>6. HAB.</p>
<p>Castro dei Volsci</p> <p>1. ESSE/HAB.</p> <p>2. ESSE</p> <p>3. HAB.</p> <p>4. ESSE/HAB.</p> <p>5. ESSE</p> <p>6. HAB.</p>	<p>Lanciano</p> <p>1. ESSE/HAB.</p> <p>2. ESSE</p> <p>3. HAB.</p> <p>4. ESSE/HAB.</p> <p>5. ESSE/HAB.</p> <p>6. HAB.</p>	<p>Introdacqua</p> <p>1. HAB.</p> <p>2. ESSE</p> <p>3. HAB.</p> <p>4. HAB.</p> <p>5. HAB.</p> <p>6. HAB.</p>	<p>Valle d'Orte</p> <p>1. HAB.</p> <p>2. HAB.</p> <p>3. HAB.</p> <p>4. HAB.</p> <p>5. HAB.</p> <p>6. HAB.</p>

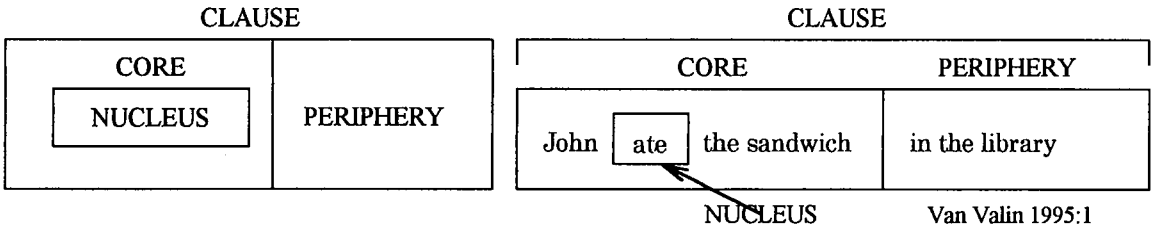
From Tuttle 1986:270

前項で示したように、現代イタリア標準語では自動詞完了助動詞の選択は動詞の LS による意味論的解釈が可能である。ラテン語の変化を見ると、HABERE が助動詞として一般的用いられるようになったのは古典期よりも後と考えられるのに対し、ESSE はすでに完了分詞との結合で受動態完了の助動詞として CL で文法化を果たしている。HABERE+完了分詞という結合はより新しい形成であり、2種の完了助動詞は異なった起源を持つ。これらが最終的に1つの範疇において主に意味的基準によって分布するのは、複合的完了形式の文法化プロセスの所産であり、イタリア語の成立過程でこの分布が生じたことは明らかである。

方言によって見られる人称による分裂現象における(唯一の)基準は、動詞の LS とは異なる文法範疇である。選択を生じさせる前段階として2つの要素の1つの範疇における重複が推定できる。<sup>5)</sup> このことを手掛かりとして、完了形式の文法化についての考察を以下で進める。

### 3. 助動詞と分詞の結合レベルの変化

Van Valin(1993, 1995)によれば、節(clause)は以下に示すような普遍的な template(Layered Structure of the Clause [LSC])を持つ。



簡単に述べれば，NUCLEUS は節の述部，core は述部+必須成分，節は core に義務的ではない付加成分を加えたものである。それぞれのレベルにオペレータという modifier が想定される。時制，アスペクト，モダリティなどの文法的範疇はそれぞれ異なったレベルで働く。時制のスコープは Clause，アスペクトのスコープは Nuclear と考えられる。現代イタリア語の完了助動詞は時制とアスペクトとで異なったレベルのスコープを持つオペレータとして捉えられる。助動詞は文法化プロセスの出発点ではオペレータではなく一般の動詞であり，過去分詞はこれと別に述部機能を果たしていたと推測される。複合完了形式の文法化プロセスは，なんらかのレベルで結びつきのあった2つの述部が1つの述部として再解釈され，essere が動詞ではなく，オペレータとなる過程ということになる。

#### 4. CL ESSE+完了分詞の機能

ガリア戦記は次の文で始まる。

##### (1) Gallia est omnis divisa in partis tres,...

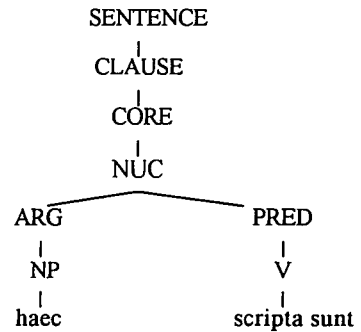
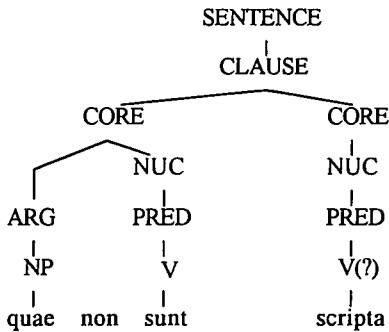
下線部は形式的には受動態完了と呼ばれるものである。ここでは現在における状態を示しているが，文脈を無視すれば（受動態）完了，あるいは *divisa* を形容詞的に捉えて（先行する行為と必ずしも関係なく）現在の状態を示すという2通りの解釈が可能となる。受動態過去形式としての意味的特性の一部には結果 *resultative* という前段階の機能が想定されるが，これは[+telic]という動詞の意味分類パラメータによる制約を受ける。<sup>9)</sup>したがって *stative* あるいは *active* の LS を示す動詞の完了分詞と ESSE との組み合わせは本来完了への拡張の動機を持たない。CL では，動詞の意味的クラスによって ESSE +完了分詞の組み合わせの示す時制あるいはアスペクトは異なっていた。ESSE が時制・アスペクトオペレータになる動機は[+telic]な動詞に含まれ，そこから他の動詞への拡張の可能性があった。

Benveniste(1960:131)は，John XX.30-1 における Gr. *eimi*+完了受動分詞と受動態完了との使い分けに対してラテン語では語順が対応していたと述べ，次の例を挙げている。

##### (2) Gr.      *hà ouk éstin gegramména ....., taúta (dè) gégraptai...*

Lat.      *quae non sunt scripta....., haec scripta sunt...*

“イエスはこの本に書かれていない(present)奇蹟を多く行った...あなたがたを信じるようにさせるためにこれらのことは書かれた(perfect)のである。”



この例は、ESSE+形容詞的完了(受動)分詞と受動態完了との区別がかなり微妙であったことを示している。Elerick(1994)によれば、ラテン語では語順がまったく自由なのではなく動詞が周縁的に現われるSOV/vos(前者が支配的)が基本的であった。(2)では、前半のsuntはCOREの終わりに置かれ、後半のsuntはscripta suntというひとつの動詞定形として一番最後に来ていると考えれば、語順の違いと機能を結びつけることができる。時代が下ると、複合受動態が統合受動態を圧迫するという事実はESSE+完了分詞がプロトタイプの過去以外に完了の機能を保持していたことを示している。<sup>7)</sup>

#### 5. CLにおけるESSE+完了分詞の文法化

CLにおける受動態現在形と完了形の機能の区別はプロトタイプ的には時制ではなく、アスペクト的であった。to-型の完了分詞は、ある行為の結果生じた状態を表わしたと考えられるので、ESSE+完了分詞は結果resultative的機能を生じさせるチャンスがあり、CLでは完了/anterior(or > past?)まで示すようになっていた。<sup>8)</sup> 完了分詞との結合ではESSEは現在と完了(あるいは過去)のオペレータとして機能することがあり、結果的に統合受動態形式を排除している。他動詞の完了分詞との結合は受動的だが必然的ではなく、現在の状態を示すか結果的であるかはLSが規定していた。またdeponent動詞の完了形がESSEと完了分詞で形成されていたことは、機能的な他動性transitivityによる再解釈に道を開いた。deponent動詞の完了で他動性が示される場合にも受動態完了と同じ形式を用いることができ、かつ意味的にも[+telic]であったので受動態完了と同じ時制を示すことが可能であったと推測できる。<sup>9)</sup>

これらがどの程度まで時制としての機能を備えていたかはかならずしも明らかではないが、状態、動作など様相の変化を示さない自動詞の完了分詞がESSEとともに用いられる可能性があるならば、受動的な含みがないまま結果>完了への拡張への動機が得られることとなる。現代イタリア語で状態と相補分布をなす動作述部では助動詞としてavereが用いられる。この形式はCL以降の発達であるが、すでに見たように方言の一部ではHABEREとESSEとの重複、さらにそこからの人称に基づく再解釈が想定される。イタリア語の方言における完了助動詞の分布の基準は幅広く認められ、ESSEとHABEREが独占的に選択される可能性も認められるが、保守的といわれるトスカーナ方言を基盤とし

た標準語において[+state]が完了助動詞の選択基準となっていることは、これを古い層に属する言語慣用の反映であるように思わせる。少なくとも意味的な特性が完了助動詞選択に関わるという特徴は、助動詞の統一化傾向より保守的ということ是可以する。

## 6. ESSE+完了分詞の時制的機能

これまで見てきたように、[-telic]というLSを持つ動詞は、ESSE+完了分詞との結合が文法化される過程では2次的な役割を果たしたに過ぎない。状態state動詞が完了的に用いられるに至るには、[+telic]の動詞で結果>完了の拡張が行われていることを前提とする必要がある。一方、典型的他動詞は[+telic]であり、ESSEとともに完了あるいは結果を示すことに問題はなかった。しかし必然的に受動的表現となる可能性が高く、動作主表示は周辺のようになって、場合によっては曖昧さが生じることもある。Varroが記録しているように(3)ではa meが“私によって”か“私から”かが曖昧であって、商取引のような場合には避けられるべきであった。<sup>10)</sup>

(3) *tanti sunt a me emptae oves.*

so-much are PREP me.ABL bought cows.NOM

しかし、おそらく受動態現在形では買うという行為に焦点があり状態の確認には不適合、能動態完了形ではかつて買ったという点に焦点があって目前の商取引には適さなくなっていたために、この形式の持つ時間的なスコープが必要となっていた。行為の出所の曖昧さを避けるためには、以下のような“古風”な表現が用いられたとされる。

(4) *tanti sunt mi emptae me (DAT)*

この状況は、統合受動態形式が新しい形式によって圧迫されていたという面と、複合受動態形式の新しい時制的機能が拡張しつつあったという二面を示している。<sup>11)</sup>またESSE+与格というのは古い印欧語的な所有表現であり、HABEREとの関連性を指摘することができる。ESSE+完了分詞の組み合わせはこのような状況を作り出す誘因であって、後に文法化されたHABERE+完了分詞よりも歴史的にも機能的にも先行し、現在につながっている。このため現代イタリア諸方言に見られる完了助動詞の分布は、ESSEから始まっていると考えるべきである。<sup>12)</sup>

## 7. HABERE+完了分詞

ロマンス語におけるHABERE完了の初期の発達段階においては特定の意味クラスの動詞が鍵で、とくにcommunication, cognition, perceptionなどの動詞が重要であったという主張をVincent(1982), Pinkster(1987)らが行っている。<sup>13)</sup>Carey(1995)はこの分析を認めただうえで、さらにmental stateとperceptionを分け、後者の出現が文法化プロセスの比較的後期であると指摘している。HABERE+完了分詞型の完了においてもプロトタイプは結果であり、主観化<sup>14)</sup>の過程を経て完了に発達すると考えら

れるからである。<sup>15)</sup>Carey は結果>完了のシフトを以下のようにまとめている(1995:95 slightly modified).

	Stage	Evidence that stage has been reached
I	resultative	mental state verbs
II	resultative→perfect	perception verbs, iteration with perception and communication verbs
III	resultative→perfect	iteration with event verbs in cause-effect contexts
IV	perfect	stative verbs
V	hot news perfect	foreground, new information contexts

これは英語による例証であるが、以下の2点を指摘することができよう。

- ① OE *haban* という動詞は HABERE に対応する、POSSESSOR と POSSESSUM との関係 POSSESSION を示す機能を持つ。完了の発達プロセスの早い段階で、内的、抽象的な対象物を示す場合が多いことは、POSSESSOR の変化に対してこの表現が用いられたことを示唆する。内的な経過は POSSESSOR と動詞行為の動作主が同一であり、また動詞行為の結果はそれ以前の状態から断絶するがゆえに表現されるのであるから、すべてが内的な経過である *mental state verb* でもっとも早く結果的意味が生じるのは、HABERE 型の完了<sup>16)</sup>に関しては通常の経路であると考えられる。
- ② *haban* 完了における *stative verbs* の出現は完了の文法化の最終段階に起きるとされているが、これは POSSESSION というプロトタイプからの解放が必要となるためである。HABERE 型完了が一般化する最終段階として想定可能なもので英語固有の特性とは考えにくい。ロマンス語では ESSE との結合が HABERE+完了分詞の出現に先行して出現しており、また ESSE と組み合わせられる動詞 LS の制約は受けていたものの完了 (>過去 /perfective) 的時制を形成していたために、次の段階として *stative verb* への(時制・アスペクト的な機能における)拡張が予測できる。これを前提として、HABERE 型が一般化した方言と ESSE を残している方言、ESSE 型が優勢な方言の分化をこれらの形式の文法化の段階と結び付けられる可能性が生じるだろう。

## 8. HABERE の特性

Seiler(1995:283)は次のように述べている。

...the POSSESSOR in possessive constructions and the ACTOR in transitive verb constructions behave in an exactly parallel way, as do also the POSSESSUM and the GOAL of the respective constructions.

前項で示したように、HABERE と他動詞完了の結びつきは[+telic]という一種のゴールを持ち、それが *mental state* の変化のように内的である場合に新しい機能の文法化の動機が生じたと考えられる。内的な対象は具体的な POSSESSUM ではなく、この結合は HABERE のプロトタイプを POSSESSION と考える限りメタファー的なものということができる。

HABERE という形態素は印欧諸語間で共通していない。これに相当する語彙は言語によって異なっており、より古い特徴を示す言語では所有を示す語彙そのものを欠く場合が多い。HABERE は POSSESSOR と POSSESSUM の2つの成分を取る点では他動詞的であるが、受動態をとることができ

ず、むしろある種の状態動詞として捉えられるべきである。Benveniste(1960:123)は、HABEREはある状態の所在地であるとしているが、とくにインド・イラン語派、ヒッタイト語、スラブ語などの古層における所有表現である与格と存在動詞の組み合わせとの平行性を明らかにしている点で、少なくとも印欧語に対しては妥当な指摘といえる。

印欧祖語は古い段階では対格言語でも能格言語でもなく、動格言語と呼ばれる類型を示していたという動格 ACTIVE 仮説<sup>17)</sup>は、古い層に属する印欧語で所有を示す動詞が語彙化されていないことの根拠として有力と思われる。動格言語でもっとも特徴的なのは、名詞と動詞に共通の2クラス(動態 active/静態 stative=非動態)とに相互に生じる支配現象であり、個人が対象を所有している状態は言語化できないので、<sup>18)</sup>HABEREに相当する概念は動格言語では語彙化されない。動態動詞は動態 active 名詞とも結びつき静態動詞よりも拡張された活用を持つ。このような区別が重要であるため、他動性は重要性を持たず通常受動態概念は成立しない。<sup>19)</sup>

印欧祖語の動詞体系は、能動・中動という区別から発達してきたことが明らかになっている。<sup>20)</sup>これは動格言語の動態と静態の区別に相当すると考えられる。古層の言語が HABERE に相当する語彙を欠き、また語彙化した言語でも要素が異なるのには、より古い段階の動格的特徴が対格型へと移行する過程の、より新しい時期にこの語彙化が行われた背景がある。ラテン語は HABERE を語彙化した。古い印欧語の特徴である存在動詞+対格という所有の表現も持って(残して)いた。

対格言語化によって状態から対象を示すことへの変化が想定されるが、状態を示すことの有標性が高まり、結果的に時制・アスペクトオペレータとしての ESSE が成立が促されている。状態は行為の結果という新しい認識パターンに対応して他動性が問われるようになり、中動ではなく能動・受動という区別が生じた。本体状態そのものを示していた統合受動形式は状態を示す ESSE と行為の結果を含む状態を示す完了分詞との組み合わせによって放逐されたと考えられる。しかしその過程の初期においては ESSE+完了分詞がつねに受動的である必然性は生じていなかった。<sup>21)</sup>(非能動的)統合完了形式は、カテゴリーとして[+stative]を示すかどうかは明白ではなくなり、対格言語化プロセスの新形成である過去形式と共通の機能を持つようになった。おそらく状態と行為との関係が捉え直され、出来事に対する認知的な再分節が終了するまでの過渡期があり、それ以前には能動に対する受動という概念は、とくに状態において明白ではなかったと考えられる。

## 9. ESSE と HABERE の分布

ESSE について、受動性を問われずに、行為の結果を含む状態一般を示す完了分詞とともに用いられる段階が想定できれば、時制・アスペクトオペレータとして一般的に ESSE が用いられる動機を考えることができる。ESSE 型の優勢な方言では、この段階で完了というカテゴリーが成立しつつあり、HABERE は周辺的に用いられるか用いられ始めないかであったと推測される。一方、HABERE 型の

優勢な方言では、ESSE の一般化よりも、他動性がより明確化される傾向が強まるなかでの HABERE と他動詞との平行性が中心的役割を果たして完了形の文法化が進行し、ESSE は他動性によって制約された受動態のマーカに機能の範囲を限定された。

ESSE 型と HABERE 型が完了のパラダイムで共存している方言(標準イタリア語を含む)では、ESSE 本来の機能範囲が保持される傾向がある。<sup>22)</sup> HABERE 系の助動詞は、それ以外の周辺的な機能を果たしているといえる。さらに reflexive における完了助動詞が essere であることも考慮すれば、現代イタリア語の完了助動詞の選択について essere はより無標的な助動詞と考えることができる。

Avere:	Underived transitive construction / Intransitive activity verbs	
Essere:	All others	Van Valin(1990:256)

## 10. 結論

HABERE による完了形式は、HABERE の一般化と、ESSE と完了分詞の結合の使用範囲の拡大、およびそれによる曖昧さの解消という問題を解決するために文法化される動機を得たと考えられる。したがって、現代イタリア諸方言のうち HABERE 型の完了形を用いない方言では、HABERE 型によって ESSE 型が駆逐されなかった可能性が高い。逆に HABERE 型を ESSE 型が駆逐したと考えるためには、HABERE が導入されても問題は解決されなかったうえに、さらに ESSE が再導入された過程を想定しなければならない。<sup>23)</sup>

ESSE 型完了形式が優勢な方言に、HABERE 要素が入り込むための動機としては、ESSE のみが用いられていた場合の他動詞に関する動作主表示の不確実性、自動詞と他動詞が形態的に区別されない場合の曖昧さが挙げられる。同一のパラダイム上に2つの形態的系列が分布するためには、同化か異化の過程が必要である。前者は、別々の機能を持つ別々の系列が、1つの機能を持つ範疇として再編されるような場合である。後者は、1つの機能を持つ範疇においてその機能が条件によって果たされなくなる事態が生じ、問題の機能を果たす形式が新たにパラダイムに導入されるような場合である。すでに見たように、HABERE の文法化は ESSE だけでは解決できない他動性に関する曖昧さを動機とすると考えられ、異化のケースといえる。

受動か能動かの曖昧さは、ESSE を用いて動詞定形以外に人称を示す要素のない他動詞の完了を表現するような場合に表面化すると考えられる。1人称と2人称が用いられる相手はたいてい発話の場に実際に居合わせていて、動作主表示に問題がなければ曖昧さが生じる可能性はあまりないが、3人称の場合は問題が生じる可能性がある。該当する方言で3人称の場合に HABERE 系の要素が導入されていて受動との弁別が図られているのは、この問題を解消するためと考えられる。また2人称単数のみが HABERE ではない *Introdaqua* 方言での現象は、聞き手(2人称)に対する発話の曖昧性の低さを示すものと考えられよう。<sup>24)</sup>このような方言的な分布は、ESSE と HABERE の完了マーカとしての



類似性を図らずも示している。印欧諸語において HABERE 型の完了形式が一般的となった誘因は、前印欧祖語の類型的特徴が対格的になるプロセスにあると仮定できる。ほぼ対格的言語であるラテン語でも、非人称動詞において動作主性が選択に関わることがあるのは古い段階の名残といえ、そこに現代イタリア語における自動詞分裂の動機があったと考えられる。

南イタリア諸方言では HABERE はもはや“所有”という語彙的機能を意味することがなく、文法的要素をもつば果たしており、イタリア諸方言で複合完了形式の完了マーカについてもっとも文法化が進行しているのはこれら方言といえる。一方、ESSE 型を一般化させた諸方言は、HABERE の語彙的機能をもっとも保持しているといえる。この点で完了形式の文法化は相対的に進んでいない。トスカーナを中心に北部では、完了形式がほとんど独占的に用いられる。これに対して南部では、単純過去形式が比較的頻繁に用いられる傾向がある。この傾向は、Heine(1993:68)の示している *completive/resultative > perfect > perfective > past > irrealis* という chain に適合しないように思われる。このモデルからは、文法化が進んでいる南部で北部よりも単純過去形式が完了形式からより圧迫を受けている（つまり完了形式がより広い範囲で用いられる）ことが予測できるが、実際には状況は逆である。この要因について、規範の問題や、外部からの影響（たとえばフランス語）などとの関連が検討に値するかもしれないが、ここでは示唆にとどめておく。

#### 注

本稿は日本ロマンス語学会第 34 回大会（広島大学）における口頭発表を加筆・修正したものである。席上貴重な助言、質問をいただいた方々に感謝する。

1. Smith (1991) 参照
2. Van Valin (1990:223): achievement verbs are derived from state verbs by means of the operator BECOME
3. Porena (1938), Rohlfs(1966) 参照
4. 収集された方言の実例については Tuttle(1986)を参照。
5. もし人称による分裂が認められなければ、かならずしも重複を推定することはできない。
6. Bybee et al (1994) 参照
7. そうでなければ現在 present を置き換えることは不可能である
8. Bybee et al. (1994:51ff)
9. ESSE が時制 operator であるのは、たとえば次例が明確に示している。(Vulgata. Luke XXIII,44-5)

*Erat autem fere hora sexta, et tenebrae factae sunt in universa terra usque in nonam horam. Et obscuratus est sol:*  
後 2 者の ESSE は時制・アスペクトオペレータであり、ESSE が示す機能を果たしていない。

10. cited by Benveniste (1960:130-1)
11. Traugott and Heine (1991:9-10)
12. Tuttle(1986)は、ESSE と HABERE の再解釈は middle において生じ、そこからすでに一般化されていた HABERE が駆逐されていったと考えている。注 23 参照
13. Benveniste (1966: 87)
14. Traugott (1989) 参照
15. “present” perfect における“present relevance”は話者の主観的判断でしかない。
16. 印欧諸語では一般的な方法である。ただし類型論的にはそうとはいえない。cf. Heine (1993)

17. 松本(1988), Lehmann(1993)参照
18. 状態は stative であるが, 対象を所有するのは active であって支配関係が成立しない。
19. Lehmann (1993:214)
20. Benveniste (1966)
21. 完了分詞が受動的なのではなく, 動詞の LS が CAUSE を含むために受動性が生じると考えられる。
22. LS に BECOME あるいは CAUSE を含む様相の変化を示す自動詞, そこから拡張した状態動詞では essere が完了助動詞である。
23. LS が助動詞選択を規定している限り現代イタリア語方言の状況はラテン語の特徴を継承しているといえ, HABERE の一般化を前提とする Tuttle(1986)の見方は無理があるように思われる。
24. Tuttle(1986)は Introacqua 方言に見られる 2 人称単数からパラダイム異化が生じたことと捉えているが, 語用論的な根拠は必ずしも示されていない。

## REFERENCES

- BENVENISTE, Emile (1960) Etre et avoir dans leurs fonctions linguistiques. *BSL LV*: 111-134.
- (1966) Actif et moyen dans le verbe. In *Problèmes de Linguistique Générale*. Paris: Gallimard, pp.168-75.
- BYBEE, Joan, PERKINS, Revere, and PAGLIUCA, William (1994) *The Evolution of Grammar*. Chicago/London: The University of Chicago Press.
- CAREY, Kathleen (1995) Subjectification and the English perfect. In STEIN, D. and S. WRIGHT (eds). *Subjectivity and subjectification*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.31-54.
- ELERICK, Charles (1994) How Latin Word Order Works. In CALBOLI, G. (ed). *Papers on Grammar IV*. Bologna: Cooperativa Libreria Universitaria Editrice Bologna, pp.99-117.
- HEINE, Bernd (1993) *Auxiliaries*. New York/London: Oxford University Press.
- LEHMANN, Winfred P. (1993) *Theoretical Basis of Indo-European Linguistics*. London/New York: Routledge.
- MAIDEN, Martin (1995) *A Linguistic History of Italian*. London/New York: Longman.
- 松本 克己 (1988) 「印欧語における能格性の問題」 『東京大学言語学論集'88』:1-19
- PINKSTER, Harm (1987) The strategy and chronology of the development of future and perfect tense auxiliaries in Latin. In HARRIS, M. and P. RAMAT (eds). *Historical Development of the Auxiliaries*. Berlin: Mouton de Gruyter, pp.193-223.
- PORENA, Manfredi (1938) Sull'uso degli ausiliari essere e avere in italiano. *Italia Dialettale* 14: 1-22.
- ROHLFS, Gerhard (1969) *Grammatica Storica della Lingua Italiana e dei suoi Dialetti. Vol.3*. Torino: Giulio Einaudi.
- SEILER, Hansjakob (1995) Cognitive-conceptual structure and linguistic encoding: language universals and typology in the UNITYP framework. In SHIBATANI, M. and T. BYNON (eds). *Approaches to Language Typology*. Oxford: Clarendon Press, pp.273-325.
- SMITH, Carlota (1991) *The Parameter of Aspect*. Dordrecht: Kluwer Academic.
- TRAUGOTT, Elizabeth C. (1989) On the rise of epistemic meanings in English: an example of subjectification in semantic change. *Language* 65: 31-55.
- TRAUGOTT, Elizabeth C. and HEINE, Bernd (1991) Introduction. In TRAUGOTT, E.C. and B. HEINE (eds). *Approaches to Grammaticalization* vol.1. Amsterdam/Philadelphia. John Benjamin, pp.1-14.
- TUTTLE, Edward F. (1986) The spread of ESSE as a universal auxiliary in Central Italo-Romance. *Medioevo Romanzo* 11: 229-287.
- VAN VALIN, Robert J., Jr. (1990) Semantic parameters of split intransitivity. *Language* 66: 221-260.
- (1993) A synopsis of role and reference grammar. In VAN VALIN, R. (ed). *Advantages in Role and Reference Grammar*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamin, pp.1-164.
- (1995) An overview of role and reference grammar. Paper presented at LSA Summer Institute.
- VINCENT, Nigel B. (1982) The development of the auxiliaries habere and essere in Romance. In VINCENT, N. and M. HARRIS (eds). *Studies in the Romance Verb*. London: Croom Helm, pp.71-96.

キーワード

完了助動詞, 自動詞分裂, 文法化

イタリア語の完了助動詞の分布を自動詞分裂として捉えた研究は存在するが, その歴史的発達を文法化という概念を用いて考察した点は独自のものである. このような視点は完了助動詞発達に意味論的根拠を与え, また複合完了形式発達プロセスの一般化への可能性を示すものと考えられるであろう.